

アニメで知る心の世界 9月

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：機動戦士ガンダム 劇場版 I II III

あらすじ

宇宙世紀 0079。人類が、増えすぎた人口を宇宙に移民させるようになって、すでに半世紀。地球から最も遠い宇宙都市サイド3は、ジオン公国を名乗り地球連邦政府に独立戦争を挑んできた。1ヶ月余りの戦いでジオン公国と連邦軍は、総人口の半分を死に至らしめ、連邦軍劣勢のまま戦争は膠着状態に陥る。

サイド7の少年アムロ・レイは、ジオン軍の奇襲をきっかけに偶然、連邦軍の新型モビルスーツ・ガンダムに乗り込み、パイロットとなる。戦火を生き残るため、戦艦ホワイトベースで少年少女たちとともに軍人としての戦いを強いられていくうちに、やがて“ニュータイプ”として覚醒していく。

今回のテーマ

I. ロボットアニメについて考えていく

Ⅱ. アムロの心の成長について考えていく

Ⅲ. アムロの成長によりシャアとの戦いはどのように変わっていったのか？ ニュータイプとは？

Ⅰ. ロボットアニメについて考えていく

1. ロボットアニメとは

1970年代に登場したアニメ。「マジンガーZ」に代表されるように少年が巨大な人型ロボットに乗り込み、強い敵を倒していく。

味方（良い対象）と敵（悪い対象）に分かれて（スプリット）敵を倒していき、

万能空想に浸る。妄想分裂ポジションの懐古的側面があるように感じられる。

→勧善懲悪の典型例：連続性がなく、深みにかけてしまう。

そのために当初子供向けの番組として作られることが多く、玩具のコマーシャルとして使われていた部分がある。

そもそも敵（悪い対象）とは何か？自分と自分を庇護してくれていた母親以外の第三者

→とりもなおさず父親の存在

ロボット：男子児童が成長願望に訴えた巨大な身体を仮構する回路（宇野常寛）

つまりロボットアニメは潜伏期の少年がエディプス期に敵わない存在であった父を倒すという万能空想を体現している。

2. 機動性戦士ガンダムとそれまでのアニメは何がちがうのか？

ガンダムでは、敵に対する迫害感や攻撃性だけでなく、敵として戦っていた人たちの人間模様が丁寧に描いている。そしてガンダムに乗り込んだアムロが敵の艦隊やモビルスーツを倒す中で、彼らの人としての生き様が見て、アムロは非常

に心を痛め、思いやりの心も持つ。→抑うつポジションの心性

cf. ガルマのフィアンセであるイセリナがアムロの前で「仇」と言い死んでいったシーン。そのことで非常にショックを受け、アムロは一時抑うつ的になる。

ジオン軍という敵を倒す中でアムロ達ホワイトベースの乗組員は自分達の仲間を失い、相手側の立場を理解し、苦悩し、それでも戦い続けなければならず、そのなかで葛藤し続ける。

妄想分裂ポジション→抑うつポジションを重ねる中で心が成熟していく過程を描いている。

敵≡父の存在、つまり敵を倒すことは父を倒すことを意味する：エディプスコンプレックス

つまり、この物語は思春期に訪れる心の葛藤を通じて、心身が成長していく物語になっており、子供だけでなく、より上の世代にも心を捉えて離さない作品に変

わり、アニメファンの年齢層を広げることになる。

Ⅱ. アムロの心の成長について考えていく

アムロの心の成長は思春期の心の成長に通じるものがあると考ええる。

1. ザクが襲撃し、アムロがガンダムに乗り込み、戦いに挑んでいく

ことはどのようなことを象徴しているのか？

1) 思春期に関して

二次性徴に前後して自分自身の心身に大変動が生じる。

潜伏期に一旦は収まっていたエディプス葛藤が再び起き、自身のこれまでのア

イデンティティが揺らぎ、今までの社会的、家庭的秩序を揺さぶる。

このとき困難である様々な情緒的葛藤を生じる：喪失、選択、独立、幻滅、混

乱 etc

思春期の真っ只中にいる彼らにとって、それはこれまで平穏な世界が突然、何

者かがやってきて崩壊していく恐怖や混乱、喪失の感情に襲われる。

2) 劇場版 I の冒頭部について考察する。

これまで平和で守られていたサイド 7：潜伏期に親の庇護の中で生きてきた象徴

しかし、ジオン軍のモビルスーツ「ザク」が侵攻し、サイド 7 に人々は震え慄（おのの）き、ザクの襲撃により、フラウ・ボウの母をはじめ多くの人々が亡くなる。

：思春期の情緒的葛藤に伴う恐怖、混乱、喪失

→この構図：平和な世の中で人々が暮らしていたが、突然脅威となる対象が出現し、これまでの秩序を壊し、周りの人々は混乱する。その中で主人公が自分の生きるべき道を見出し、成長していく

この構図で描かれるアニメは数多く見られる。例：鬼滅の刃、進撃の巨人 etc このようなシーンは非常に衝撃的だが、視聴者の心をとらえて離さないのは、このようなシーンが我々が心に抱く、親に代表される親愛なる人達との分離に伴う情緒的混乱（とりわけ思春期の情緒的混乱）を呼び起こすからのように考えられる。

3) ザクの襲撃でアムロの心はどのように揺れ動いたのか？

ザクの襲撃の中でアムロは父を見つけるが、父が住民よりもモビルスーツの保護を部下達に支持しているのをアムロは見てしまい、強く失望する。

「父さんは人間よりもモビルスーツの方が大切なんですか！」

→今まで絶対的存在と信じてきた父への失望と反発

一方で家庭を顧みずに父が没頭したモビルスーツにアムロは関心を持ち、操る。

→ある種父が仕立てたスーツを着るようなものであり、父が託した思いを受け継ぐ

つまりザク襲撃（思春期の情緒的葛藤）という混乱の中でアムロの親に対する愛憎まみれた葛藤を抱いている。

4) ガンダムを操るとはどういうことなのか？

思春期において、急激な心身の成長は戸惑いや驚きが伴うものだが、ガンダムに初めて乗ったときにアムロはまさにそれを体現している。

アムロのぎこちないガンダムの操縦に対して

父「なんて攻撃の仕方だ。誰がコクピットに乗っている！」

ガンダムがザクに初めて対峙した時の様子

「怯えていやがるぜ。このモビルスーツはよ」

ガンダムがザクの顔面を掴んで壊したとき

「す、すごい。」

→思春期に少年の身体から大人の身体に変化していくことを戸惑い、驚いていることの象徴

アムロはガンダムに乗り込み、ホワイトベースの乗組員と一緒に宇宙へと飛び

たつ。そこでシャアの乗り込むシャア専用ザクと対峙するが、全く敵わない。

「こ、これが、たたかい…。」

→大人の世界に入り、自分が全く歯が立たない現実直面する様と似ている。ま

さにエディプス葛藤

2. アムロとエディプス葛藤について考えていく

1) エディプス葛藤とは？

ギリシャ神話であるエディプス王の悲劇的運命になぞらえている。その神話にはエディプス王が父親を殺し母と結婚するということが描かれている。その点にフロイトは着想を得て、考え出された概念。

乳幼児期から性愛衝動をもち、無意識に異性の親の愛情を得ようとし、同性の親に対しては嫉妬する、その葛藤を表す。当初4歳から6歳に現れるが、心身の成長が著しい思春期にその葛藤が再び強く出現する。

アムロは、成り行きからガンダムというモビルスーツのパイロットとなったが、やがてエースパイロットに成長していく。その過程にはジオン軍との戦いの中での色々な人たちと出会いが欠かせなかった。そこには父親的な存在の登場人物が何人か登場しており、彼らにアムロは対峙し、反発し、怒りをぶつけ、交流し、心的に成長していく。そこにはアムロの内的世界におけるエディプス葛藤が

常に通底しているように考えられる。

2) アムロ VS ブライト

ブライト・ノア：19 歳 ホワイトベースの艦長として様々な指揮を行う。

→父的存在

当初は士官候補生としてホワイトベースに乗り込むが、ザクの急襲から正規軍人が次々と倒れる中、なし崩し的に艦長になってしまった。ある意味、見習いの立場であった彼が、ドタバタの中で突然指揮を取らざるを得ない立場になったこともあり、戸惑いや不安があったと考えられる。

だからこそ、唯一ガンダムを操縦できるアムロに対して、必要以上に居丈高（いたけだか）に振る舞い、それが二人のぶつかり合いを助長させていたように感じられる。

①宇宙に飛び立ち、シャアとの初めての対決の後にホワイトベースに戻った時にブライトと対面したとき

ブライト「ガンダムの性能を当てにしすぎる。戦いはもっと有効に行うべき。」

アムロ「な、なに」

ブライト「甘ったれるな。ガンダムを任されたからには、貴様はパイロットなのだ。この船を守る義務がある。」

(中略)

アムロ「やれるとはいえない。けど、やるしかないんだ。僕にはあなたが…」

ブライト「ああ、憎んでくれていいよ。直ちにガンダムの整備を始めてくれ。君が中心になってな。」

→アムロは軍人ではなく、ごく普通の少年（だからこの時は私服でガンダムを操作している）であった。しかしザクを倒し、誰もが恐るシャアと対峙した。本来であれば賞賛され、労いの言葉をかけられてもおかしくない状況だが、ブライトは頭ごなしに否定し、乗組員としての自覚を促す。そこに葛藤するアムロの姿がある。これは思春期において急速に身体が成長し、周囲から急に大人への自覚を促され、心がそこに追いつかず、戸惑いと反発を覚える心性と重なる。

一方でブライトはアムロに期待している。だから最後の言葉を言っている。

②地球に着陸するときジオンの勢力圏内に入ってしまい、戦わざるを得なくなったときに、ルナツーから大気圏に突入した際の戦いの疲れから眠れなくなり、アムロは戦うことを拒否したときの対話

アムロ「そんなにガンダムを動かしたいんならあなた自身がやればいいんですよ。」

ブライト（アムロの襟首を掴み）「なに！できればやっている。貴様にいわれるまでもなくな」

アムロ「僕だってできるからやっているんじゃないですよ。」

そこでブライトはアムロを殴る

アムロ「殴ったね！」

ブライト「殴ってなぜ悪いか！貴様はいい。そしてわめいていれば、気分も晴れるんだからな！」

アムロ「僕がそんなに安っぽい人間ですか？」

そこで再びブライトはアムロを殴る

アムロ「二度もぶった。オヤジにもぶたれたことないのに！」

ブライト「それが甘ったれなんだ。殴られもせずに一人前になった奴がどこにいるものか！」

アムロ「二度とガンダムなんかに乗るものか！」

中略

ブライト「アムロ、今のままだったら貴様は虫ケラだ。俺はそれだけの才能があったらシャアを越えられる奴だと思っていたがな。残念だよ。」

その言葉にハッとするアムロ

フラウ「自分のやったこと自惚れられない人なんて嫌いよ。今日までホワイトベースを守ってきたには誰でもない俺だって言えないアムロなんて男じゃない！」

中略

アムロ「悔しいけれど、僕は男なんだな。(ホワイトベースが攻撃を受け、ふらつく) シャアか！」

その後アムロはガンダムに乗り込み、大活躍をする。(シャアにはここでも敵わなかったが)

ホワイトベースに戻ると大人の女性であるマチルダがおり、彼女に感謝され、照

れてしまうアムロ。そしてそれに嫉妬するフラウ。

シャアに対峙する都度、全く歯が立たず、大気圏突入の際はホワイトベースに戻れず、ルナツーから大気圏に突入し、どうにか乗り切ったが、それに伴う疲弊により戦意を喪失したアムロ。そんな彼を叱咤し、殴るブライト。ブライトの行為は強制させる行為であるが、社会で生きるには自分をコントロールすることの大切さを伝えている。一方で、アムロがシャアを越えられると言っているようにアムロへの期待もある。これは父親が子供に社会で十分活躍できる人間になれる存在なんだと期待し、成長を見守る姿と重なる。そこには暖かくアムロの悩みや苦しみを受け止めたフラウの存在が必要不可欠である。ここでは母親のように感じられる。

その後、先頭で大活躍するアムロ。戦いの後に出会うマチルダ。彼がこの1件を通じて大人に成長し、大人の女性に出会い、一目惚れする。そこで嫉妬するフラウ。→子供が成人になり、親から離れていく様子にも捉えられる。

3) 成長したアムロに再会した母はどう感じたのか？

アムロは久しぶりに地球の実家に戻るが、地球連邦軍の兵隊達に勝手に家を使われている様子に非常に衝撃をうける。戦争による悲惨さを物語っているが、一方で、昔のような家族構造が壊れてしまった象徴とも考えられる。

そして避難民キャンプに母がいることを知り、そこにコアファイターで向かい母に再会する。(ここでもキャンプの人にコアファイターを隠すよう言われる。)

その後、親子水入らずの時間が流れるが、それも束の間、ジオン兵の取り締まりに来る。そこで当初、アムロは布団の中に隠れていたが、必死に隠す母の対応も難しく、アムロは拳銃でジオン兵を撃ってしまう。

母「あの人達だって、子供もあるだろうに、それを鉄砲を、むけて撃つなんて…すさんだねぇ。」

アムロ「じゃ、母さんは僕がやられてもいいっていうのかい？せ、戦争なんだよ。」

母「そ、そうだけど、そうだけれども人様に鉄砲を向けるなんて」

→思春期に至る過程で、エディプス葛藤が起きている状況で、その情緒的葛藤が対処できず、肛門期的退行がおき、やるかやられるかを感じている中で受け入れ

てもらえなかった子のショック、そしてその子どもの攻撃性を母親が受け入れられず戸惑う、その母子のすれ違いが起きている。

アムロ「母さん、母さんは僕を愛していないのかい？」

母「そんな、子どもを愛さない母親なんているものかい。」

アムロ「嘘つき！」

→ガンダムを操作できるようになり、ある程度大人に近づいたアムロに母は戸惑い、母の「すさんだ」という言葉で傷つくアムロ。アムロは成長し、強く逞しくなった自分を認めて、受け入れてもらいたかったが、それが叶わず、怒りをぶつける。

母「アムロ、私はお前をこんな風に育てた覚えはないよ。昔のお前に戻っておくれよ。」

アムロ「今は戦争なんだよ。」

母「なんて情けない子だろう。」

母「男手で育てたからかしら。あんな子じゃなかったのに…。(アムロの射撃の映像) 虫も殺せなかった子なのに (泣)」

→母はアムロが今までのような潜伏期ではなく、思春期の情緒的葛藤の中でもがき苦しんでいる状況にあることが受け入れられず、以前のような頃に帰ってほしいと懇願する。つまり母はアムロをいつまでも潜伏期以前のような子どものように捉えていて、きちんと子離れできていない。その母子のすれ違いに強い喪失感を感じるアムロ。

その後、ホワイトベースから連絡があり、コアファイターに乗り込む

アムロ「皆、自分勝手に自分のことしか考えていない。僕だって僕だって好きでこんなことやっているもんか！」

→喪失を受け入れられず、周囲に対して迫害的に捉え、怒りを感じている。

→妄想分裂ポジションの心性。

ホワイトベースの乗組員：アムロの成長を認め、受け入れ、必要としている。

母：アムロを愛しているが、彼の成長に戸惑い、受け入れられない

→母と別れ、アムロはホワイトベースに乗り込む。フラウと母の服の色が一緒。

フラウが、振り向くと母が泣き崩れてしまう。

ある種ホワイトベースそのものがアムロの母のような存在になってきている。

4) アムロ VS ランバ・ラル

劇場版 I の最後でザクより性能が良い、ランバ・ラルの乗るグフに苦戦するガンダム。しかしそのガンダムの性能そして操作に驚きを隠せないランバ・ラル。

→心身が成長し、大人と同じ知性・体格を備えつつある子が父親と対峙する様のようにも感じられる。

ブライトからガンダムの操縦者をアムロ以外にもつけることを提案され、腹を立て、飛び出したアムロ。アムロ自身はガンダムと一心同体であり、ガンダムがあるからこそ、自分はこのホワイトベースで存在意義があると感じており、他の操縦者を付けることは自分がこのなかで必要とされていないと感じ、飛び出してしまふ。それは家族のなかで自分の居場所を失ったと考え、家出をすることに似ている。

そしてホワイトベースを飛び出して、砂漠の酒場のカウンターに座っていたときにランバ・ラルとその子分達が入ってくる。

ハモン「あの少年にも」と言いマスターにアムロにも食事の提供の旨を伝える。

アムロ「ご厚意は嬉しいんですけども僕には頂けません。」

ハモン「なぜ？」

アムロ「あなたに物を恵んでもらう理由はありませんので。」

ハモン「君のことを私が気に入ったからなんだけど。理由にならないかしら。」

(中略)

アムロ「僕、乞食じゃありませんし。」

ランバ・ラル「気に入ったぞ。小僧。sonだけ物事をはっきり言うとはな。ハモンだけの奢りじゃない。俺からも奢らせてもらうよ。なら食っていけるだろ。」

アムロはランバ・ラルたちがジオン軍であるから食事の提供を断ったとも考えられるが、一方でアムロは母に思春期の情緒的葛藤を受け入れてもらえず、すさんだと言われ、昔のように戻ることを求められる。それは潜伏期への退行であ

り、それは受け入れられない。

ある種、彼ら大人たちからの食事の提供は、大人の庇護を受けることであり、潜伏期への退行と感じ断ったとも考えられる。(まず女性であるハモンが言ったところがミソ)そしてその断ったことをランバ・ラルに気に入られる。それは母と異なり、大人になり、主体的になっていく自分を受け止められた部分でもあるように感じられる。

フラウ・ボウが地球連邦軍の一味として、ランバ・ラルの部下に捉えられ、彼女とアムロが仲間であることが発覚し、アムロが銃を携えていることを発覚しても

ランバ・ラル「いい目をしているな。それに度胸もいい。ますます気に入った。だがな、戦場であつたらこうも行かんぞ。」

アムロの母と違い、ある程度大人に近づいたアムロを評価し、受け止めている。しかし一人前とはみなしていないから帰したように感じられる。

(勿論、ホワイトベースの居場所を知るためでもあるが)

その後、ランバ・ラルたちがホワイトベースに攻め入り、そこにアムロが応戦し、ランバ・ラルが操縦するグフとアムロが操縦するガンダムの一騎打ちが繰り広げられる。そこでお互いのグフとガンダムの乗組員であったと知る。

ランバ・ラル「まさかな、時代が変わったようだな。坊やみたいなのがパイロットとは！」

そしてグフが倒され、ランバ・ラルが脱走する前の言う。

ランバ・ラル「みごとだな。しかし坊主、自分の力で勝ったのではないぞ！モビルスーツの性能のおかげだということを忘れるな。」

アムロ「負け惜しみを！」

ランバ・ラルは「時代が変わった」と話すように世代交代が起こりつつあるという話を語っているように感じられる。一方でそのことを受け入れられない部分でもある。そして自分に勝ったのが「モビルスーツの性能のおかげ」というのは負け惜しみでもあるが、依然、周りの環境に自分が左右されていること、アムロが周囲の環境の中で確固としたアイデンティティを確立していないということとを指摘している。

→ランバ・ラルは部下を従え、彼らに慕われ、組織を指揮している。

一方でホワイトベースに帰ってきたアムロは独断行動ということで独房に閉じ込められる。そこでランバ・ラルとの関わりを回想する。

アムロ「僕は、あの人に勝ちたい。」

→アムロはランバ・ラルのような人間以上になりたい

ランバ・ラルはホワイトベースに乗り込むが、作戦に失敗し、自害してしまう。

しかし彼との出会いによってアムロにとって自分の生きるべき方向性を指し示めされたのではないかと考えられる。

Ⅲ. アムロの成長によりシャアとの戦いはどのように変わっていったのか？ ニュータイプとは？

1. アムロ vs シャアの変化

シャアは赤いモビルスーツに主に乗るが、たった1機で5隻もの戦艦を沈め、「赤い彗星」と連邦軍から恐れられる存在であり、ガンダムの操縦したばかりのアムロは到底叶わない存在であった。→エディプス葛藤

それがアムロが成長するにつれて、シャアのアムロへの考え方が変わっていく。

1) ガンダムにアムロが乗り始めた頃、シャアが初めて対峙したとき

シャア「見せてもらおうか！連邦軍のモビルスーツの性能とやらを」

アムロ「やります！相手がザクなら人間じゃないんだから僕だって。」

ブライト「やめろ！アムロ 君にはまだ。」

アムロ「やります！」

アムロはシャア専用ザクめがけてビームライフルを放つが全く当たらず、逆に

シャアが放ったビームがガンダムに直撃する。

アムロ「こ…これが…戦い…。」

その後もアムロはシャアに翻弄される

しかし援護にまわったザクを一撃で倒してしまう。

シャア「一撃で、一撃で撃破か！」

アムロ「一撃で…ザクを」

→シャアはモビルスーツの性能に驚くものの、パイロットの存在つまりアムロの
パイロットの腕としては全く眼中なかったと思われる。

ある種、父が思春期を迎えた子供の身体的成長や腕力に驚くものの、そのほかの
面においてまだまだ敵いつこない未熟な存在であると子供を捉えているような
部分にも感じられる。

一方でアムロの視点で観ると、子供が成長し、親と同等になれたかと思ったら全
然敵わない。その中で社会に飛び出される恐怖、そんなエディプス葛藤を描いて
いるようにも感じられる。

しかしシャアは部下たちがガンダムに次々に倒されていくことで、徐々にガン
ダムの存在を意識し始める。

2) シャアが左遷されたあと、アムロは様々な人との出会いや戦いを通して成長
していく。シャアが大佐として戻り、連邦軍本部があるジャブローへの総攻撃の

際、シャアは専用機ズゴックに乗り込む。そのとき久しぶりにガンダムに対峙し、その戦闘で腕部を破壊される。

シャア「私にプレッシャーをかけるパイロットとは何者なんだ！」

→ここで初めてガンダムのパイロットに意識する。

3) 父との再会、そしてアムロとシャアの初めての直接対面

父と再会し、別れた後にララに出会い、シャアと直接対面したことは、色々と示唆に富んでいるように感じられる。

サイド6で休憩をとっていたアムロは偶然父親との再会を果たす。父に出会えたことに非常に喜び、アムロは父の住む住み込みのジャンク屋に招かれるが、その雑然とした部屋の様子や「ガンダムの性能が格段に上がる」と言われ渡された回路部品はとうに時代遅れのもので、そのことがわからずに嬉しそうに振る舞い、研究に打ち込もうとする父にアムロは父が酸素欠乏症にかかってしまったと考え、強く失望する。

→家庭を顧みないでガンダムという素晴らしいモビルスーツを作った父にこれ

まで反発を感じながらも畏敬と尊敬の念を感じていたが、再会した父がそうではなかく、なにか無様な存在に見え、非常にショックを受けたものと考えられる。

→思春期に心身が著しく成長し、成人と同等の身体や知性を備えつつある中で、尊敬と畏怖の念を抱いていた父親が実は非常にちっぽけだったと痛感し、非常に失望する様子に非常に似ている。

その後、ララァ（シャアの恋人）に出会い、なにか通じ合うものを感じ、シャアと初めて対面することは象徴的である。

→父を既に乗り越え、今まで全然敵わない存在であったシャアと対峙するところまで成長したということを意味するようにも思われる。：新たなエディプス葛藤の始まり。（アムロ、ララァ、シャアの三者関係）

4）ララァとの出会いそして喪失

アムロは実の母には成長したアムロを受け入れて貰えなかった。アムロはその喪失をなかなか受け入れられずに苦しんでいたように感じられる。

その後、いろいろな女性（フラウ、マチルダ、ハモン）が成長していくアムロに関わっていった。

フラウはアムロを受け止めようとするが、飛躍的に成長していくアムロに戸惑いを感じ、アムロもそこに受け止めてもらえていない感情を抱いていた。マチルダにも認められ、アムロは恋慕の念を持つが深く関わることができず、亡くなってしまう。ハモンにも気に入られるが拒絶してしまう。

その中でララァとアムロは深く情緒的に交流しているように感じられる。

アムロの搭乗するガンダムとララァが搭乗するエルメスが戦闘で対峙したとき、テレパシーで彼らは通じ合い、対話する場面。

ララァ「あなたには力がありすぎるのよ。あなたを倒さねばシャアが死ぬ。」

アムロ「シャア…それが」

ララァ「あなたが来るのが遅すぎたのよ。なぜあなたは今になって現れたの？」

→アムロに愛情を向けられ、ララァがアムロへの愛情が高まっていることに対

して自分自身が戸惑っている

ラァ「あなたはこんなにも戦えるじゃない。なぜなの？あなたには守るべき人も守るべきものがないというのに」

アムロ「なんだと！」

ラァ「私には見える。あなたにはふるさともなければ家族もないわ。人を愛してもいない。」

アムロ「だから、だからってどうだっていうんだよ。守るべきものがなくて戦ってはいけないのか？」

ラァ「それは不自然なのよ。」

→アムロに対して自分への愛情を断念するよう論しているように感じられる。

アムロ「ではラァはなんだ。」

ラァ「私を救ってくれた人のために私は戦っているわ。」

アムロ「たった…それだけのために。」

ララァ「それは人が生きるための真理よ。」

アムロ「では…この僕達の出会いは何なんだ。」

ララァ「あぁ（絶叫する）」

→ララァは自分への愛情の断念を諭しているが、今ここで心が通じ合いつつあることをアムロが直面させ、今起きている現実を突きつけられたララァは非常に混乱してしまう。

ララァ「なぜなの？なぜ遅れて私はあなたに出会ったのかしら？」

アムロ「運命だとしたら、酷いものだよな。残酷だよな。」

ララァ「あなたに出会ってどうなるの？どうにもならないわ。」

アムロ「しかしこれは事実だ。認めなくてはならないんだ。」

ララァ「認めてどうなるの？出会ってもどうにもならない出会いなのよ。」

→敵同士である二人の距離が近づき、結ばれつつあることに周囲が危惧する。

シャア「ララァ！！奴とのざれごとはやめろ！！」

ゲルググに乗ったシャアはエルメスとガンダムの間に入り、二人の仲を引き裂こうとする。そこでガンダムはゲルググの腕を切り落とし、ガンダムがゲルググにとどめを刺そうとしたときに、エルメスが間に入り、エルメスは壊れ、ララァは亡くなってしまう。

アムロ「僕は取り返しのつかないことをしてしまった。」

シャア「今の私にはガンダムをたおせん。ララァ私を導いてくれ。」

【解説】

ここの場面において、シャアを父、ララァを母、アムロを子と捉えた時、子が思春期を経て大きく成長し、父を凌駕し、母への愛情を向けられたとき（大概は他の女性に遷移するのだが）の家族としての組織が大きく変化していることに両親が戸惑い、受け入れられず、父は子が抱く思いを断ち切れようとしてしている。しかし子の方が既に成長しているために父がやられてしまうと母が察知し、間に入るが、逆に母が子にやられてしまう。そういう構図が描かれているように

考えられる。

ここで重要なことは子が母を倒すということ。この見解に関して色々な解釈があると思うが、ここでは2つの解釈が考えられる。そしてそのどちらもが起きているように感じられる。

①母（ララァ）を倒してしまい、父（シャア）が生き延びてしまい、ある意味父を倒し、母と通じ合うという典型的なエディプス葛藤を遂げることができなかったという解釈。

→この場合、子は出会う女性に理想の母像を希求するものの、程なく失望してしまい、出会いと別れを繰り返してしまう。ある種実母との再演でも

②母（ララァ）と子（アムロ）とが相互に深い情緒的交流をするが一方でその愛を断念し、喪失を受け入れたという解釈。

→エディプス葛藤を乗り越え、一層成熟に向かう。

サールズのエディプスコンプレックスの考え方

相互的でロマンティックな親子の愛の物語であり、親自身が親であり同時に一つのカップルであるという役割を担い、この強烈な親－子の愛の関係のなかで子どもは自分のロマンティックな愛が受け入れられ、価値づけられるという感覚を持つと同時にそれを断念しなければならないという現実を受け入れていく。その両方の要素が子どもを心理的に強化する。

この愛と喪失の考え方がサールズのエディプスコンプレックス。

2. ニュータイプとは？

ニュータイプに関して

ジオン・ダイクン「宇宙世紀に適応した人間の革新」

ブライト「人は現在以上に認識力を増して、より分かり合える…」

「認識力の向上とパイロット能力の向上は関係するのですか？」

ガンダムの中盤位からこの言葉が頻回に出現し、それ以降のガンダムシリーズ

のキーワードになっているが、確固としたこの言葉の定義はなく、曖昧な中でニ

ュータイプという言葉が使われている。この概念に関して色々な考え方があると思うが、安彦良和氏はこの概念を「世代論」と捉えており、その点から考えてみたい。

ガンダムは 1979 年に生み出された作品。

1979 年時にアムロと同じ 15 歳の人々をアムロ世代として考えると、彼らは 1964 年生まれ。この年東京オリンピックが開催される。

1956 年の経済白書の結びで「もはや戦後ではない」という記述。そこから 1972 年まで日本は高度経済成長を遂げ、先進国の仲間入りをする。「1 億総中流」という言葉がこの頃使われるようになる。そしてこの時代から恋愛結婚の比率がお見合い結婚の比率に逆転する。

この時代は「ニューエイジ」というスピリチュアルと心理学的なものが非常にクローズアップされ、人の心にこれまで以上に關心を持つようになったと考えられる。

→物質的豊かさが広く享受されていく一方で、個人主義が浸透していく。それゆえ、心の豊かさということを考えるようになり、自我とは何か？その中で自身が社会の中で活躍したい思い、他者との交流（とりわけ異性）への強い思いが出て

きたとも考えられる。

ガンダムというアニメはアムロをはじめとしたホワイトベースの乗組員が戦いを通して、大人へと成長していく物語であるが、とりわけアムロの成長は著しく、ニュータイプとして覚醒していく。アムロの心の成長は思春期の心の成長に通じると述べたが、その世代の若者たちはアムロの活躍する姿をみて、社会で著しく活躍し、他者と深く交流したいという夢を持ったのではないだろうか？